

『チーム医療』

今年の夏は函館もなかなか蒸し暑い日が続いている。金沢、福岡で鍛えられた私も、このところはこの暑さのせいで、何となく気だるさを感じながら仕事をしている。

そんなある日、ちょっとしたスタッフの言動に少し腹を立ててしまい、その日に勤務しているある看護師に大きな愚痴をこぼしていたら、その看護師から「先生、腹を立てない、立てない」と言われ、「だってさー」とそれでも愚痴る私に、また一言「チーム医療、チーム医療」と一括されてしまった。スタッフからたしなめられる院長、ここにあり。日頃、偉そうにしている私もこの時ばかりはすっかり小さくなっていった。



ホスピス理念のひとつの特徴として、チーム医療があげられる。

一人の病める人を、身体的な部分だけではなく、全人的に支えていくケアのあり方は、医師一人ががんばっても、看護師一人ががんばっても、それだけで完成されるものではない。ことにホスピスの現場では、我々医師ができることはそう多くない。もちろん痛みやその他の身体的症状をコントロールすることにおいて医師の役割は大きいのだが、その他はむしろ他の職種の役割が大きくなっていく。ホスピスでは、多くの職種のスタッフが皆対等の関係にあり、密な連携を取りながら、一人の患者及び家族をチームで支えていくのである。

このチーム医療という言葉は当たり前のように思えるが、医療の現場でどれだけそれを実践できているかという、現実的には非常に少ないと思える。ホスピス・緩和ケア関係の学会、研究会、その他の会合に参加してみるとよく分かる。一般病院から参加した看護スタッフの“医師の協力、理解が得られない”という現場の叫び声がとても多く聞こえてくる。未だに医師は自分の考えや治療方針などを主張することは得意であっても、他の職種の意見に耳を傾けるという姿勢があまりみられない。結果として、チーム医療は、医師が足並みを乱すために、完全なチームとはなり得ないのである。そんな影で、いつも看護師を初めとしたスタッフが苦勞しているという実情があるようだ。

私自身はどうであるかと考えてみると、決して、最初からチーム医療を深く考えている医師ではなかったように思う。患者に対する姿勢については、昔から今に至るまで、変わっていないと思うが、対スタッフに対しては自信が無い。

間違いなく研修医時代は謙虚な気持ちを持っていたはずである。注射ひとつ不確実な技術しか持たず、最初は注射薬をつめたり、点滴の準備をしたり、そんな当たり前のことすら、満足にできなかった。図々しくも、優しそうな看護師さんを選んで、色々教わったものである。研修医が看護師によって育てられていた時代であった。

やがて、そんな私も少しずつ経験を積むことによって、多少の自信も持てるようになったのだが、一方で、ちょっとした看護師のミスでよく怒るようになっていた。

たとえば、こんなこともあった。自分が担当していた患者について、採血(血液検査)の指示を看護師に出す。それを受け、看護師が採血をして、その日の夕方に検査結果が出る。それをもとにまた次の治療方針を考えていく予定であった。ある時、夕方になっても結果が返ってこないことから、採血し忘れていたことが判明し、つい看護師を怒鳴ってしまっていた。患者の治療が後手後手にまわるかもしれないという無念さ、腹立たしさが怒りとなり、それをストレートに看護師にぶつけていたのである。

しかし、いつしか私もあまり現場で怒るようなことが少なくなった。指導者の立場で後輩を厳しく指導する上で、叱る場合はあったとしても、看護スタッフを怒鳴り散らすようなことはしなくなった。前述したようなミスがあったとしても、たしなめる程度であった。皆からは、年をとって丸くなったとか、結婚して丸くなった、と言われたが、そうではない。やはり、自分が経験を積むことにより、余裕が生まれ、チームの中でのわずかなミスを何らかの形で補うことができるようになった。そして、自分が上からただ指示するのではなく、皆と協力して治療にあたっているのだ、という意識が出てきたからでもある。その結果として、ちょっとしたスタッフのミスで怒る必

要も無くなったのである。

また、チームの中で、最も患者に接している看護師の意見によく耳を傾けるようになっていた。骨髄移植という大きな治療の土台を皆で一緒に作り上げたということも変わるきっかけだったのかもしれない。とにかく、自然とチーム医療の考え方が身についていた。

患者やその家族を支える上では、そのケアにあたる我々の技術を磨くことはもちろんであるが、心にも余裕を持たなくてはならない。そして、一緒にケアにあたるスタッフ同士がお互いに敬意をはらい、信頼を築く必要がある。医師だから、看護師だからではなく、同じスタッフの一員として、いい関係でありたいと今は強く思う。

しかし、常日頃、そう思っている、冒頭のようにになってしまう自分もいる。これは人間だから許してもらおうとしよう。いや暑さのせいに違いない。(苦笑)

